

大阪21世紀協会ではそれを「学術、芸術、技術、スポーツ」と定義し、このなかには生活文化も含めています。私は、文化は不易の文化と流行の文化があると思っています。流行の文化は移ろい変わりますが、不易の文化は長年にわたって築き上げてきた人類の遺産です。そうした不易の文化はつねに意識的なサポートが必要で、いったん消してしまうと二度と立ち上がれないものもあるでしょう。だから流行の文化と不易の文化をしっかりと分けてフォローする必要があると思います。浪花節も大阪で生まれて長らく愛されている文化ですね。

春野 浪曲といっても、若い人たちにとってはテレビでやっていないのでぜんぜんイメージがないですね。私もこの世界に入る前は同じでした。しかし初めて寄席で生の落語を聴いて、テレビには映ってないけれど世の中には面白くて楽しい芸能がいっぱいあるんだということを知りました。映画やテレビなどの作られた映像とは違って、浪曲や落語、講談は、聴いている人の心のなかに映像をつくることのできるすごいパワーをもっているんです。私は寄席通いをするなかで二代目春野百合子さんの浪曲に出会い、どうしても弟子入りしたくて6年前に東京から大阪にやってきました。大阪は、

文楽や浪曲など、日本のさまざまな伝統芸能が生まれ染み付いたところ。私は今、そこに足をつけて暮らしているだけで、いろんなことが吸収できるんじゃないかと強く感じています。一方、大阪の浪曲界の現状はかなり厳しくて、私たち若手の上が70～80代と大きく世代が開いています。しかも三味線を弾く曲師となると、わずか4人。最高齢が92歳の藤信初子師匠でその次が70代の岡本貞子師匠。その後はもう若手です。10年後の大阪の浪曲界を考えるとすごく不安ですね。

堀井 文楽の世界も、無形文化財である大夫さんや人形遣いさんたちとその後に続く若い技

芸員の方々との年齢

差が大きく、人材養成は大きな課題です。そうした人材養成費や文楽技芸員



懐徳堂 大正5年(1916年)に再建されたもの(写真提供(財)懐徳堂記念会)



大阪国際会議場(大阪市北区中之島)



小泉純一郎元首相らによる「桜の会・平成の通り抜け」プロジェクトのスタートを祝う植樹式(毛馬桜之宮公園/2005年1月8日)



歌舞伎船乗り込み(道頓堀川/2008年7月)